

資質・能力の育成に向けた 内容の改善・充実について

1. 乳幼児の遊びや生活に関する現状と課題

- 意図的に用意しなければ、乳幼児の発達に必要な、様々な人やものと直接的・具体的に関わる体験を十分に確保することが困難になっている。
- 一部の幼児教育施設(注)においては、乳幼児の興味・関心ではなく、SNS等からの偏った情報やそれらに影響を受けた一部の保護者のニーズを優先するなどし、乳幼児の発達にふさわしくない保育が行われているとの指摘がある。（注）幼児教育施設：幼稚園、保育所、認定こども園

2. 0歳児からの育ちと学びの連続性・一貫性の確保

- 保育所、認定こども園等では、在園期間が0歳児から5歳児という長期にわたり、また1日の保育時間が長時間に及ぶ。さらに、幼稚園においても、0歳児から2歳児の受入れが進んでいること等を踏まえて、乳幼児の生活と発達の連続性を念頭に置きながら、園での日々の生活や遊びの更なる充実を図っていく必要がある。

(1) 3歳未満児の保育における課題

- 低年齢児の保育所、認定こども園等の利用率は増加傾向が続いており、その対応が求められる。
- 集団生活における保育士、保育教諭等との信頼関係の下に、同年代の乳幼児と共に過ごす中で育ちや学び、一人一人の乳幼児の生活や遊びの充実といった観点から、0歳児からの環境を通して行う保育における教育に関わる側面での活動の連続性及び発展的な広がり確保することが重要である。

(2) 入園時・移行時の保育における課題

- 家庭、地域型保育事業、認可外保育施設等からの入園時や、3歳未満児クラスから3歳以上児クラスへの移行時などは、乳幼児にとって周囲の環境や一日の生活の流れが大きく変化する。
- このような時期の保育においては、一人一人が期待感や安心感をもって、新しい環境に慣れ親しんでいくことを支えるとともに、設置者や施設類型を問わず、すべての乳幼児の育ちや学びを支える実践の一貫性を保障していくことが重要である。

3. 現代的課題への対応

- 乳幼児の健康及び安全に関する様々な課題（感染症や自然災害等）に対して、迅速かつ適切に対応できるよう、より一層の配慮や取組を充実させていくことが重要である。



- ◆ 保育所、認定こども園等においては、乳幼児が自己を十分に発揮し、生活や遊びが豊かに展開される中で、一人一人にふさわしい経験が積み重ねられるよう、保育の内容を充実させていくことは極めて重要である。保育士、保育教諭等は、乳幼児と共に保育環境を構成しながら、保育所、認定こども園等の生活全体を通して「育みたい資質・能力」を育むよう努めることとする。
- ◆ 乳幼児の**自発的な活動としての遊び**を通して資質・能力が育成されるよう、全ての保育所、認定こども園等においては、**環境を通して行う保育を基本**としつつ、遊びの中で様々な人やものと直接的・具体的に関わる体験の充実を図ることが重要である。このことを踏まえて、0歳から18歳の発達や学びの連続性の確保の観点から、以下の①～③について、下記に示すとおり改善・充実を図ってはどうか。

① 0歳児からの育ちとともに、学びを支える保育の内容の充実

- 座る、はう、歩くなどの運動機能の発達に伴い、乳幼児は自ら体を動かし、身近なものに関心をもって関わり、探索活動を活発に行うようになっていく。こうした発達の流れに沿って、0歳児からの自発的な遊びの中で多様な動きを促す援助の充実を図ってはどうか。
- 保育士、保育教諭等による温かく丁寧な関わりを通して育まれる安心感や信頼感の下、乳幼児が自分なりに、思いや考えを表現しようとしたり、他の乳幼児への関心を深め自ら関わろうとしたりする意欲を支える援助を充実させてはどうか。
- 乳幼児の自発性や探索意欲を高めるよう環境を計画的に整え、乳幼児が自ら関わろうとする姿を保育士、保育教諭等が見守り、共感し、楽しさを共有するとともに、乳幼児の主体的な遊びや活動を更に豊かにしていくために、遊びや活動の展開に応じて環境を構成・再構成することの重要性を再確認してはどうか。

② 0歳児からの円滑な接続・移行

- 乳児は、心身の発達の諸側面が特に密接に関連しており、保育の内容における三つの視点も重なり合う部分が多い。やがて、身体・運動・情緒・認知・社会性などの側面が次第に分化し、乳幼児と周囲の人や物との関わりも多様化・複雑化するにつれて、保育の内容も五つの領域へと広がっていく。こうした発達の流れを踏まえ、特に乳児から1歳以上3歳未満児、さらに3歳以上児の保育の内容の円滑な接続を確保すべきではないか。
- また、乳幼児が新しい環境に円滑に移行できるように配慮した援助の充実を図ってはどうか。

③ 乳幼児の健康及び安全の確保に向けた取組の充実

- 乳幼児の生命の保持と健やかな生活を充実させる観点から、感染症、自然災害等への対応について、より一層の配慮や取組の充実を図ってはどうか。

0歳児からの育ちとともに、学びを支える保育の内容の充実のイメージ

- これまでも、生命の保持と情緒の安定が図られた安心できる生活の中で、乳幼児が環境への興味や関心を高め、自発的な活動としての生活や遊びを通して様々な学びを積み重ねていくよう、養護と教育が一体となった保育が図られてきたところ。
- 近年では、家庭や地域で戸外で遊ぶ機会が減少し、その面白さに気付かないまま室内遊びに偏る乳幼児も少なくない。そこで、乳幼児の関心を戸外にも向け、日常的に身近な自然環境に触れること、体全体を動かしたり、手指を使ったりして遊ぶことの楽しさや充実感を味わえるような援助の充実を図ってはどうか。
- 行動範囲の広がりとともに、乳幼児を取り巻く世界（モノ・ヒト・コト）への関わりや認識もまた、より豊かに広がっていく。保育士、保育教諭等との信頼関係の下で安心して過ごせる場において、乳幼児が身の回りのものを介して人とやり取りし、試行錯誤を重ねながら学びを深める過程を支える援助の充実を図ってはどうか。
- 乳幼児が体験したことや、生活や遊びの流れに即した保育士、保育教諭等による豊かな言葉かけは、言葉の理解や獲得を促すとともに、乳幼児が自分なりに考えたり、思いを伝えようとしたりする意欲を支える。受容的・応答的な関わりを基本としつつ、こうした援助の充実を図ってはどうか。
- 乳幼児の「したい」「やってみたい」という思いや願いは、保育士、保育教諭等の直接的・間接的な援助によって支えられ、実現するとともに、引き出されていく。乳幼児一人一人に寄り添った働きかけに加えて、保育士、保育教諭等の意図やねらいを反映した環境の構成も重要であるため、乳幼児の活動や遊びの展開に応じて、乳幼児と共に環境を柔軟に構成・再構成していくことに重点を置くべきではないか。

戸外の光や風と共に、 葉の感触や音を身体感覚を通して学ぶ

8か月

・パリパリと鳴る音に
反応し、保育士の
手をじっと見る。



葉っぱがいっぱい
あるよ！

(葉っぱを揉んで見せながら)
パリパリ鳴ってるね！

・落ち葉をいくつかパラパラ
〜と目の前に落として見せると、
すぐに反応して手を伸ばし、
葉っぱをぎゅっと握る。

あーあー



うーうー

・握った手を上下に振りながら
「あーあー」「うーうー」と声も
出し、“見て見て”とでも言わ
んばかりに保育士に笑顔で
アピール。



・風が吹いて、ふと見上げて
何かをじっと見ている。
・視線の先を追ってみると、
近くの葉が風で揺れているの
に気付いた様子。

はいはいによって広がる世界



11か月

- ▶ スポンジ製の大型積み木。伝い歩きをする様子に合わせて、並べ直す。

11か月



2歳8か月

11か月

- ▶ 座ると自分だけの落ち着いた空間が確保され、つかまり立ちすると、他児の姿が見える高さの仕切り。

- ▶ 運動機能の発達により、行動範囲が広がるとともに、視界が変化する。
- ▶ 互いの視線が合うなど、他児との出会いや交流の楽しさを味わう。
- ▶ お座り、はいはい、つかまり立ち、伝い歩きなどの動きに合わせた環境の構成・再構成。

絵本を介した保育士や他児とのやりとり



A児

1歳2か月

バナナ、食べる？

- ・保育士が他児と絵本を読んでいたところに、A児がやってくる。A児に絵本の中のバナナを見せながら、保育士が「バナナ、食べる？」と声をかけると、自分から絵本のバナナに手を伸ばして、食べる真似をする。



ぱく

美味しい？



はい、どうぞ

B児

1歳6か月

- ・今度は、B児がやってきて、読み聞かせに加わる。
- ・B児が、絵本のページの果物をつまんで、保育士の口元に運ぶ。「はい、どうぞ」「美味しい！」
- ・B児は、A児の口元にも運び、A児は自然に“あーん”と口を開け、食べる真似をする。
- ・しばらく、2人は、言葉はなくても、イメージを共有しながらのやりとりを続けた。



ぱく

じっくり水と向き合い、 試行錯誤を楽しむ



わ～
冷た～い

2歳6か月

- ▶ 水面が波打つ様子を観察する。
- ▶ 指で混ぜて濁る様子などをじっくり見る。



- ▶ 石を落とす高さを変えて、
舞い上がる水しぶきと
音の違いを楽しむ。

石

低い
ところから…

水たまり



石

高い
ところから…

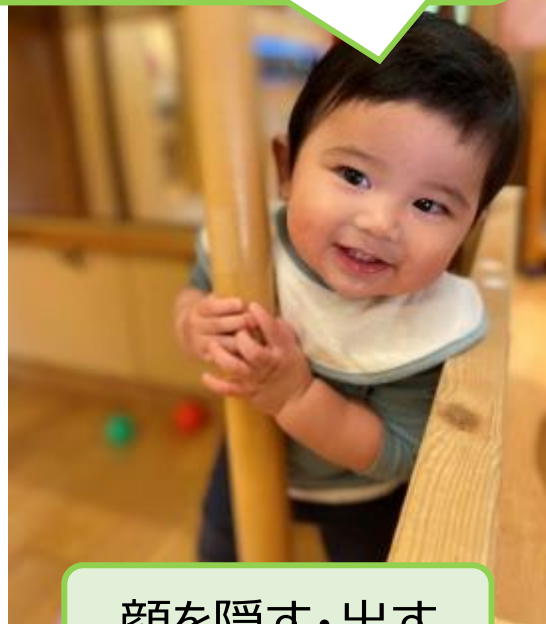
水たまり

0歳児からの円滑な接続・移行のイメージ

- これまでも、乳児保育の内容の三つの視点と1歳以上3歳未満児及び3歳以上児の保育の内容における五つの領域は発達的な連続性をもつものであり、それぞれの時期にふさわしい生活や遊びの充実が図られてきたところ。
- 入園時の年齢や時期によって、集団生活の経験年数が異なる乳幼児がいること等を踏まえつつ、0歳児から小学校就学前までの保育の連続性・一貫性を確保していくことが重要ではないか。
- 0歳児から2歳児が安心できる空間の中で、保育士、保育教諭等とのやりとりを楽しんだり、同年齢・異年齢の乳幼児への関心や憧れを抱きつつ、園での生活や遊びに徐々に慣れ親しんでいくことを支えるような援助の充実が重要ではないか。

安心できる空間の中で、保育士とのやりとりを楽しむ

- ▶ 入園当初は、保育士に抱っこを求めるなど、不安な様子を見せていた。



顔を隠す・出す



- ▶ 顔を隠すことで、保育士の姿が見えなくなる一瞬のドキドキも楽しめるように。



「ば～」で笑う

11か月

- ▶ 入園から3週間。上下左右に顔を出したり、隠したりしながら、乳幼児自らが他者（保育士）との視覚的な距離（見える／見えない）を調整しつつ、そのつながりを体験している。
- ▶ 様々な場所で保育士とふと目が合い、やりとりを繰り返し楽しめるような、安心できる空間をつくる。

乳幼児同士の交流が集団生活への関心や期待につながる

【受入れの実際～インタビュー調査の結果から～】

未就園児対象の2歳児クラスから、入園後の3歳児クラスへの移行の時期が近づいたら、子供が自分の目で見て、直接体験することで、見通しをもって楽しみにできるような機会を設けています。

- 3歳児クラスへの入園が近づいたら、園内の散歩から始めて、他の部屋の様子を見に行ったり、3歳以上の子供の活動に参加したりすることもあります。
- 4月からの所属クラスを1か月前には決めています。そのクラスの活動を、最初は2歳児の受入れクラス担当保育者と一緒に、徐々に子供だけで体験します。3歳児クラスでの集団生活についていけるように準備するという視点ではなく、子供にとって滑らかな移行が可能になるように配慮しています。
- 3歳児が作った線路を借りてきて電車を走らせる、5歳児が拾ってきたどんぐりを見せながら「どんぐりころころ」の手遊びをするなど、3歳以上児の遊びで使った教材や製作物を活かすこともあります。発達の連続性を踏まえて0～2歳児の受入れと3歳以上児の保育のつながりを大切にしています。



ドーナツ屋さんでお買い物



年上の子供の遊びの様子をじっくり見る

幼保連携型
認定こども園での取組

1. 幼児の遊びや生活に関する現状と課題

- 意図的に用意しなければ、幼児の発達に必要な、様々な人やものと直接的・具体的に関わる体験を十分に確保することが困難になっている。
- 一部の幼児教育施設においては、幼児の興味・関心ではなく、SNS等からの偏った情報やそれらに影響を受けた一部の保護者のニーズを優先するなどし、幼児の発達にふさわしくない教育活動が行われているとの指摘がある。

2. 幼小中高（幼児教育施設（幼稚園、保育所、認定こども園）から小学校・中学校・高等学校等）を通じた教育の改善・充実

- 「論点整理」においては、「全ての幼児児童生徒に育むべき資質・能力育成の具体化・深化と並行して、一人一人の『好き』（興味・関心）を育み、『得意』を伸ばしながら、それらを原動力として学び全体への動機付けを図っていく取組と、当事者意識を持って、自分の意見を形成し、多様な他者と対話や合意を図る取組を同時に進め、これらが有機的に関わり合い高まっていく教育課程に変革していく必要がある」とされている。
- この実現を幼小中高を通じて目指す中で、幼児教育においては、小・中・高における教育課程の変革を支える基盤的役割を果たすため、「言葉を用いて思考を深めていく指導」や「他者に関わり協同する力の育成」が求められている。

(1) 言葉にまつわる課題

- ・考えを自分なりの言葉で表現する体験は積み重ねているが、遊びや生活をよりよくしたいと思い、更に考えようとして言葉を用いる体験を一層充実する必要があるとの指摘。
- ・小学校以上の学習の中では、教科で扱う言葉が現実の事象や経験と結び付いていないために、知識が形式的・断片的になりやすく、深い理解につながらない場合があるとの指摘。

(2) 他者との関わりに関する課題

- ・幼児教育施設に入園するまで、家族以外の人と関わる経験が少ない場合が多いとの指摘。
- ・SNSや生成AIの負の側面の影響もあり社会分断の可能性等も指摘される中で、自分とは行動・態度、考え方、成育環境などが異なる者とは関わろうとせず、他者との交流が同質な集団内に偏る傾向への懸念。

3. 現代的課題への対応

- 全身を使って体を動かすことや多様な動きを経験することは実践されているが、“幼児の自発的な活動としての遊びの中で”体験することが重要である点や、そうした体験を通して身体感覚を養うことなどについては、一部の園では十分に理解されていない面があり、“先生からの一方的な指示等により体を動かすための活動”になっている場合もあるとの指摘がある。
- 令和6年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査によると、体力合計点は小学校男子は前年度からほぼ横ばい、小学校女子は引き続き低下、1週間の総運動時間（体育の授業を除く）が60分未満の割合は小学校男子・女子ともにほぼ横ばいであった。



内容の改善・充実の方向性（案）

3～5歳児

- ◆ 幼児教育は、幼児期の特性を踏まえ、**環境を通して行うもの**であることを基本としており、幼児の**自発的な活動としての遊び**を通して資質・能力が育成されるよう、全ての幼児教育施設において、遊びの中で様々な人やものと直接的・具体的に関わる体験が一層充実されることを改善・充実の根幹とすべきではないか。
- ◆ その上で、小・中・高で育成を目指す資質・能力の基礎を培う観点から、「学びに向かう力、人間性等」のみならず、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」を一体的に育む改善・充実をどのように図っていくか、別途、具体的に検討すべきではないか。
- ◆ 特に、論点整理等で指摘されたことを踏まえ、以下の④～⑥について、下記に示すとおり改善・充実を図ってはどうか。

④言葉を用いて思考を深めていく指導の充実

補足イメージ①

- 遊びの中での直接的・具体的な体験を通して、実感を伴って言葉を身に付けていくことが、言葉を通じた概念の習得や深い意味理解につながることから、個別の単語の習得に終始するのではなく、幼児が言葉を手掛かりに自分を取り巻く世界（モノ・ヒト・コト）を理解しようとすることの重要性を再確認すべきではないか。
- 思考力の芽生えが培われるよう、自分の表したい・伝えたい考えを言葉で表現する中で、先生の援助（言葉を添える、代弁する、視覚的資料等を合わせる等）を受けながら、更に考えようとして言葉を用いる指導の充実を図ってはどうか。
- その際、技能的な伸長ではなく、遊びや生活をより楽しく面白くするために、言葉を用いて自分の考えがまとまったり深まったりすることへの喜びや満足感等を十分味わうことに重点を置くべきではないか。

⑤他者と関わり協同する力の育成に向けた指導の充実

補足イメージ②

- 多くの他の幼児や先生とともに過ごす、園という身近な社会において、自分とは異なる他者と関わり、他者とともに目標を形成し、その目標に向かって協同していく力の育成を目指し、指導の充実を図ってはどうか。
- その際、自分とは異なる他者への寛容を基に、思いや考えを伝え合い、葛藤やつまづきをも体験しながら、自他を尊重し、幼児なりのルールや納得解を形成するなどして、園内の身近な社会の一員として遊びや生活を作っていくことを通じて、当事者意識と社会参画意識の芽生えが育まれることが重要ではないか。

⑥“様々な遊びの中で”多様な動きを行う指導の充実

補足イメージ③

- “幼児の自発的な活動としての遊びの中で”多様な動きを体験することの重要性と、そうした体験を通して身体感覚を養うことを踏まえた指導の充実を図ってはどうか。
- 幼児期からの運動習慣の形成を図るため、領域「健康」等における指導に加え、文部科学省・スポーツ庁、自治体等が行う幼児の運動促進のための取組を活用するなどして、1日の生活全体の中で、幼児が自発的に体を動かして遊ぶ機会を充実することが重要ではないか。

これまでも、例えば、遊びや生活の中で、“物の性質や仕組みなどを生かして、考えたり予想したり工夫したりする”、“友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり考え直したりする”、“自分の考えを相手に分かるように言葉で伝えようとする”ことで、自分の考えがまとまったり深まったりする”といった体験が充実するよう、指導が図られてきたところ。

- 自分の考えをまとめたり深めたりするためには言葉を用いて表現する活動が重要であることから、主に領域「言葉」において、思考力の芽生えを培う指導の充実を図ってはどうか。なお、自分の考えを表したい・伝えたいと思っても、考えがうまくまとまらない・言葉で表せない場合等も多いことから、言葉を添えたり代弁したりするほか、視覚的資料等を合わせるなどして、先生が適切な援助をすることが必要ではないか。
- また、遊びや生活をより楽しく面白くするために、自分の考えがまとまったり深まったりすることへの喜びや満足感等を基盤にして、更に考えを深めていこうとする意欲が高まっていくことから、幼児期においては、考えることや言葉で表現することの技能的な伸長ではなく、喜びや満足感等を味わうことに重点を置くべきではないか。
- こうした指導の充実により、考えることを楽しみ、考えようとする幼児の姿が育つことを目指してはどうか。このことが支えとなり、小学校以降の質の高い探究的な学びや各教科等の学習活動の充実が図られることが期待される。

（実践例のイメージ）

- ・リレーで勝ちたいA児たちは、どうしたら速く走れるか、話し合いを始めました。B児は先生が保育室に掲示した世界陸上の切り抜きを見て、しばらくすると「こうやって走るといいと思う」とその場で走る真似をしてみせました。
- ・その姿を見たA児は、手の形に着目しました。
A児「手をパーにしているのは、何で？」
B児「パーじゃなくて、シュツとしてるんだよ。（指示を指さし）テレビで見たのとおんなじ。」
先生「手の形をシュツとさせると速く走れるの?!」
B児「新幹線みたいになってるでしょ。だから速く走れるってこと。」
先生「新幹線みたい？」と首をかしげると、
A児「そっか！新幹線の形みたいに手がシュツと
なってるから、新幹線みたいに速いんだね。」
B児「そういうこと！」
先生「なるほど！シュツという形が大事なんだね。」

（実践例のイメージ）

- ・ダンゴムシが大量発生し花壇の花が育たない事件が発生しました。花もダンゴムシも守るため、ダンゴムシの好きそうな餌を置いて捕まえ、保護することにしました。
- ・餌ごとにとどれくらいダンゴムシが集まったか、毎日結果を見て話し合います。ある日の仕掛けについてA児から提案がありました。
A児「食べ物の味がする方がダンゴムシさん来るんじゃない？」
先生「どういこと？」と言いながら、ホワイトボードに花壇の絵を描き出します。
先生「これ花壇な。お花が葉っぱ食べられてたやろう？ここにキャベツとかお野菜を置いてるやろう？」
A児「ここに食べ物があったら、いいにおいって思ってダンゴムシさんがこう来るから、
ここ（花と餌の間）にぼとんってダンゴムシさんが落ちるカップを置いたら？」
先生「ああ、ここに？（花と餌の間にカップを1つ描き足す）」
B児「でもこっちからも来るかも。」C児「こっちからもこっちからも。（指差して）」
先生「じゃあカップはどう置いたらいい？」
A児「こうー。（ホワイトボードに○を描くように指差して）」
先生「お野菜の周りにたくさんカップを置くてこと？（餌場の周りを囲むように小さなカップを置く絵を描く）」
A児・B児「そう！」

これまで、幼児自身が、保護者や周囲の人々に温かく見守られているという安定感から生まれる人に対する信頼感をもつこと、さらに、その信頼感に支えられて自分自身の生活の確立を援助することにより、人と関わる力の基礎を培ってきたところ。園生活では、先生との信頼関係を築くことが必要であり、それを基盤としながら様々なことを自分の力で行う充実感や満足感を味わうようにすることが重要。また、多くの他の幼児や先生と触れ合う中で、自分の感情や意思を表現しながら、自己の存在感や他の人々と共に活動する楽しさを味わい、他の幼児とぶつかったり協力したりすることを通して、人と関わる力を養い協同性を育む指導が図られてきたところ。

- 協同性は領域「人間関係」のみで育まれるのではないが、社会的に、自分とは行動・態度、考え方、成育環境などが異なる者とは関わろうとせず、他者との交流が同質な集団内に偏る傾向が高まる中で、主に人と関わる力を養う領域「人間関係」において、自分とは異なる他者と関わり、他者とともに目標を形成し、その目標に向かって協同する力の育成に向けて、指導の充実を図ってはどうか。その際、時には待ったり見守ったりといった、時間をかけて意図的・計画的に働き掛ける指導も必要であることへの理解を図るべきではないか。
- 指導の充実に当たっては、自分とは異なる他者への寛容を基に、思いや考えを伝え合い、葛藤やつまづきをも体験しながら、自他を尊重し、幼児なりのルールや納得解を形成するなどして、園内の身近な社会の一員として遊びや生活を作っていくことを通じて、当事者意識と社会参画意識の芽生えが育まれることが重要ではないか。
- 小・中・高では、全ての教科等において「協働的な学び」を一層充実するとともに、特別活動において児童生徒が主体となってルールの形成や学校生活の改善、学校行事などの様々な活動に参画することを促進する方向性で検討が進められている。このため、幼児の発達の段階に応じた活動を通じて他者と関わり協同する力を育成することにより、小・中・高の方向性ともつながることが期待される。

（実践例のイメージ）

様々な場面で、必要感の下、話し合いながら、みんなが納得できるルールを決め、みんなでルールを守ることにより、より良い遊びや生活が生まれることを実感できるよう、多くの実践が図られている。

- ・例えば、数台しかない車型の乗り物が1台空き、やっと乗ることができたA児のところに、B児が「代わって」とお願いしに来ました。A児は、先生と一緒にテラスに座って待っている間、ずっと待っていてつまらない、早く乗って遊びたいという気持ちになっていましたが、今は代わりたくない、もっと遊びたいという気持ちが大きくなっています。こうした両方の気持ちを経験する中で、先生が「困ったね。みんな、乗りたいんだね。どうしたらいいと思う？」と乗りたい気持ちに寄り添いながら問い掛けることで、A児たちは互いの気持ちに気付くようになり、最終的には“駐車場を作って、園庭を1周して駐車場に戻って来たら交代する”というルールをみんなで作りました。A児たちは、ルールを守ると楽しく遊べることに気付き、ルールの大切さを実感をもって理解できるようになりました。

こうした実践は、道具・材料の使い方や遊びのルールを決める、行事等の内容を決めるといった様々な場面で行われている。

（実践例のイメージ）

- ・A児とB児が樋を使って「流しそうめん」遊びをしようとしていました。先生が他の幼児たちに「A児とB児が流しそうめんをするんだって!」と声を掛けたところ、C児とD児が集まってきました。
- ・A児たちは、「これはどこに置く?」「あそこをつなぎ目がズレてるよ。」などと互いに声を掛け合いながら、樋をたくさんつなぎ始めました。E児は砂場の脇でA児たちの様子を見ています。先生は、「ああ、お水運ぶの大変。」と言いながら、2つ持っていたバケツのうち1つをE児に渡して、「Eちゃん、力貸してくれる?」と言うと、E児はバケツを持ち、「お水どうぞ。」と何度も運びました。
- ・役割を各々自然に担いつつ、水の通路を作り始めたA児たちの楽しそうな声を聞いて、他の幼児たちも加わりました。先生も、遊ぶ仲間の一員として、必要そうな用具を運んだり、樋同士をつなぐ手伝いをしたりしながら、うまく遊びに入り込めていない幼児に声掛けをするなど援助をしました。
- ・やがて水路が完成し、みんなで「流しそうめん」遊びを楽しみました。

- これまでも、幼児が様々な遊びの中で全身を使って体を動かすことや多様な動きを経験することができるよう実践されてきたが、“幼児の自発的な活動としての遊びの中で”体験することの重要性や、そうした体験を通して身体感覚を養うことについて、あらためて確認する必要がある。
- また、「幼児期運動指針」では、動きの獲得の方向性として、「動きの多様化」（年齢とともに獲得する動きが増大すること）と「動きの洗練化」（基本的な動きの運動の仕方（動作様式）がうまくなっていくこと）があることが示されるとともに、量（時間）的な目安として、「幼稚園、保育所などに限らず、家庭や地域での活動も含めた一日の生活全体の身体活動を合わせて、幼児が様々な遊びを中心に、毎日、合計60分以上、楽しく体を動かすことが望ましい」とされている。
- これらを踏まえ、主に領域「健康」において、“幼児の自発的な活動としての遊びの中で”多様な動きを体験することの重要性と、そうした体験を通して身体感覚を養うことを踏まえた指導の充実を図ってはどうか。
また、文部科学省・スポーツ庁、自治体等が行う幼児の運動促進のための取組を活用するなどして、1日の生活全体の中で、幼児が自発的に体を動かして遊ぶ機会を充実することが重要ではないか。
- これにより、小学校体育科における「運動遊び」等の指導との円滑な接続が図られるとともに、生涯に渡る運動習慣の形成につながることが期待される。

（実践例のイメージ）

- ・A児たちは、自分の好きな〇〇戦隊の変身ポーズをしたり、筒を武器に見立てて掛け声をかけ合ったりしています。
- ・先生は、「Aさんのポーズは格好いいね。向こうの広い所でもう1回見せて。」と認め言葉を掛けながら戸外へ遊びの場を移していきます。
- ・A児たちは、互いに友達が付いて来ているかを気にしながら園庭を駆け回ります。一人が「あっちに怪獣がいる！」と築山を登ると他の幼児も登り、慎重に足を運びながら岩場を下っていきます。園庭の固定遊具一つ一つを身をかわしながらジグザグに走り抜け、また築山を登り、岩場から下ってきます。日頃は機敏な動きがあまり見られず慎重なB児も、〇〇戦隊になりきってみんなと一緒に走ったり登ったりしています。
- ・先生も「怪獣はどこに行ったかな？」などと幼児のイメージを捉えながら言葉を掛けます。次第に走るコースが固まってきて、築山の岩場から「トーッ！」と声を上げながら飛び下りることを繰り返し楽しみました。

（実践例のイメージ）

- ・絵本からイメージがわいた幼児たちは、遊戯室に平均台やマットなどを組み合わせた探検コースを作り始めました。
- ・マットの上に置いた大型箱積木をワニの背中、平均台を橋ということにして、バランスをとりながら、落ちないように渡ります。段ボールで作ったトンネルの中を這って通った後は、蜘蛛の巣に見立てた高さの違うゴムに触れないように、そっと足を上げてまたいだりくぐったりします。
- ・次第に、幼児はすいすいと平均台を渡るようになったので、先生が探検隊の仲間の一員として「石ころがあるってことね。」と平均台に玉入れの玉をおいてイメージを伝え、幼児は玉をまたいで平均台を渡ります。
- ・そのうちに「こんなの簡単！もっと難しくしようよ。この岩、おっかいぞ！」と箱積木を平均台の上に乗せました。そして、その積木をまたいで平均台から落ちないように渡ることに挑戦し始めました。

（取組のイメージ）

- 例えば、
- ・「幼児期運動指針」について、文部科学省・スポーツ庁、こども家庭庁が連携して、一層の周知啓発を図る。
 - ・自治体等において、幼児教育施設と連携・協力し、保護者等を対象に、幼児期運動指針等を活用した幼児期に運動遊びを行うことの重要性の啓発のための取組を実施。
 - ・自治体等において、幼児教育施設の遊戯室や園庭を活用し、幼児を対象に運動遊びの取組を実施。
 - ・幼稚園教諭、保育士、保育教諭が、自治体等が行う幼児の運動促進のための取組等に研修として参加。

參考資料



- 意図的に用意しなければ、幼児の発達に必要な、様々な人やものと直接的・具体的に関わる体験を十分に確保することが困難になっている
- 一部の幼児教育施設においては、幼児の興味・関心ではなく、SNS等からの偏った情報やそれらに影響を受けた一部の保護者のニーズを優先するなどし、幼児の発達にふさわしくない教育活動が行われているとの指摘がある



考えられる方向性と論点①（幼稚園教育要領等関係）

1. 直接的・具体的な体験の一層の充実

- どの幼児教育施設においても、幼児の自発的な活動としての遊びを通して資質・能力が育まれるよう、様々な人やものと直接的・具体的に関わる体験を一層充実する方向性で検討すべき

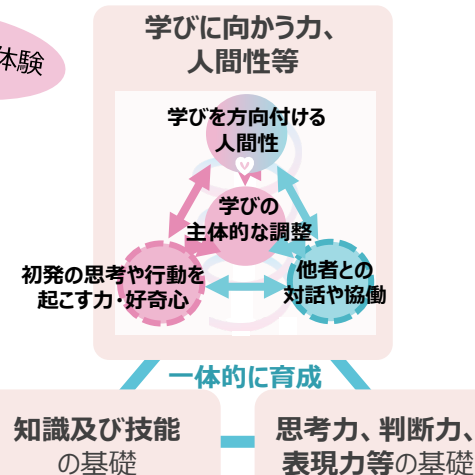
2. 幼児教育と小学校教育との円滑な接続の推進

- 幼児教育施設と小学校の両者が、相互に共通理解を図り、各園・校における架け橋期（5歳児から小学校1年生の2年間）のカリキュラムの作成やスタートカリキュラムの充実等の取組も含め、円滑な接続を一層推進する方向性で検討すべき

幼児教育における遊びの中で
直接的・具体的な体験を通した学び

客観的・抽象的な認識や思考が
発達していくことになる
小学校以降の生活や学習の基盤となる

心と体が動く体験



【具体的な方策】

- ・子供の資質・能力を育む学びの連続性を明確にするため、幼稚園教育要領等においても、学習指導要領との連続性を表形式やデジタルを活用して示していくべき
- ・子供それぞれの興味・関心や一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出す観点から、幼児教育の「環境を通して行う教育」と小学校以降の授業改善の取組について相互理解が図られるよう、幼小中高の指導方法の趣旨の一貫性を明確にすべき

「主体的・対話的で深い学び」の実現を通じた

自らの人生を舵取りする力 と 民主的で持続可能な社会の創り手 育成（今後の検討イメージ）

「好き」を育み、「得意」を伸ばす
（興味・関心）



**当事者意識を持って、自分の意見を
形成し、対話と合意ができる**

【各教科等での検討イメージ】

好き・得意をベースとした
主体的な進路選択の促進

高
中
小
幼

課題設定
の充実

グループ探究
個人探究

総合



生きて働く「確かな知識」の習得

興味・関心が広がる
教材・学習方法の選択を促進

自分の意見を表現する活動の充実

探究的な要素を持つ学習活動の充実

家庭学習の内容を自律的に決めら
れるような段階的指導
（家庭学習ははじめ学習習慣の確立を含む）

各教科等

児童生徒主体のルール
形成や学校生活改善、
行事の創造等の明確化
（みんなが学びやすいルールや環
境の構築を含む）

納得解を形成しようとす
ることの重要性の明文化
（安易な多数決の回避や少数意
見の吟味）

特別活動

考え、議論する
道徳の徹底
（主体的な判断の
重要性、知・徳・体
の調和のとれた発達
に向けた、道徳的価
値の対立を乗り越え
る必要性や道徳的
実践の強調）

道徳

言葉を用いて思考を深めていく指導

他者と関わり協同する力の育成

多様な子供を誰一人取り残さない
視点としての個別最適な学びと協
働的な学びの一体的充実

科学的知見も生かした
効果的な指導計画・授業方法
児童生徒の学習方略の指導

障害や認知特性等
多様な実態を踏まえた調整
（教科等、家庭学習含む）

全ての活動の基盤としての
心理的安全性の確保

学びをデザインする高度専門職としての教師
「裁量的な時間」をはじめ柔軟な教育課程による余白

デジタル学習基盤をはじめとする基盤整備
総合的な勤務環境整備

情報技術が認知や行動に与えるリスク

① 子供たちは常時ネット接続の環境に

● 青少年のインターネットの利用時間の1日平均

小学生 中学生 高校生
約3時間44分 約5時間2分 約6時間19分

○インターネットを利用すると回答した青少年の平均利用時間は、前年と比べ約5分増加し、約5時間2分。

○目的ごとの平均利用時間は趣味・娯楽が最も多く、約3時間1分。

● 子供専用のスマホ保有率

小学生	中学生	高校生
72.0%	95.3%	99.1%
(0.0%)	(2.6%)	(3.9%)

(2010年度)※

● 青少年の健康面への懸念

✓ 最も多いのは「インターネットにのめりこんで勉強に集中できなかったり、睡眠不足になったりしたことがある」(24.6%)

(出典)

令和6年度「青少年のインターネット利用環境実態調査」報告書 令和7年3月こども家庭庁

※ 平成22年度「青少年のインターネット利用環境実態調査」結果について(概要) 平成23年2月 内閣府

平成26年度より調査方法等を変更したため、平成25年度以前の調査結果を直接比較ができないことに留意。「小学生」の調査対象は、満10歳以上。

② フィルターバブル、エコーチェンバーの影響

● 検索結果やSNS等で表示されている情報がパーソナライズされていることへの認識

- ✓ 日本は「知っている」(44.7%)、他の対象国(80%~90%)と比べて大幅に低い
- ✓ 理解が不足していると情報を正しく評価できず、社会生活で誤った判断を下す危険

(出所) 情報通信白書令和5年度版

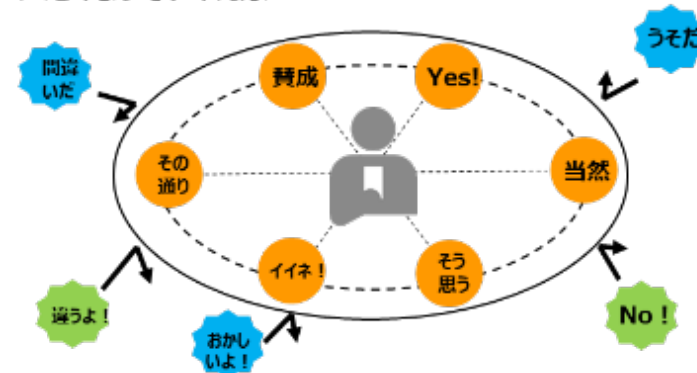
フィルターバブル現象

自分の好み情報「だけ」に囲まれ、多様な意見から隔離されやすくなる現象。



エコーチェンバー現象

同じような意見が、閉ざされた空間の中で反響して大きくなっていく現象

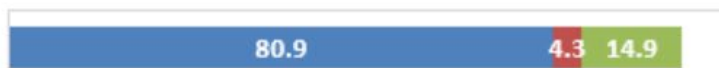


「幼児の運動促進のための取組を実施している」と回答した教育委員会の割合

■実施している ■実施する予定である ■実施していない

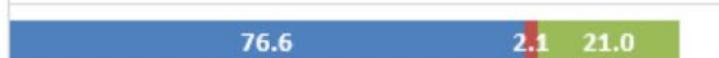
都道府県

令和元年度

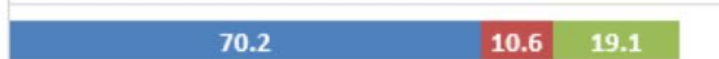


令和2年度

令和3年度



令和4年度



令和5年度



令和6年度



政令指定都市

令和元年度

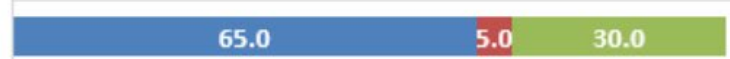


令和2年度

令和3年度



令和4年度



令和5年度



令和6年度



市区町村

令和元年度



令和2年度

令和3年度



令和4年度



令和5年度

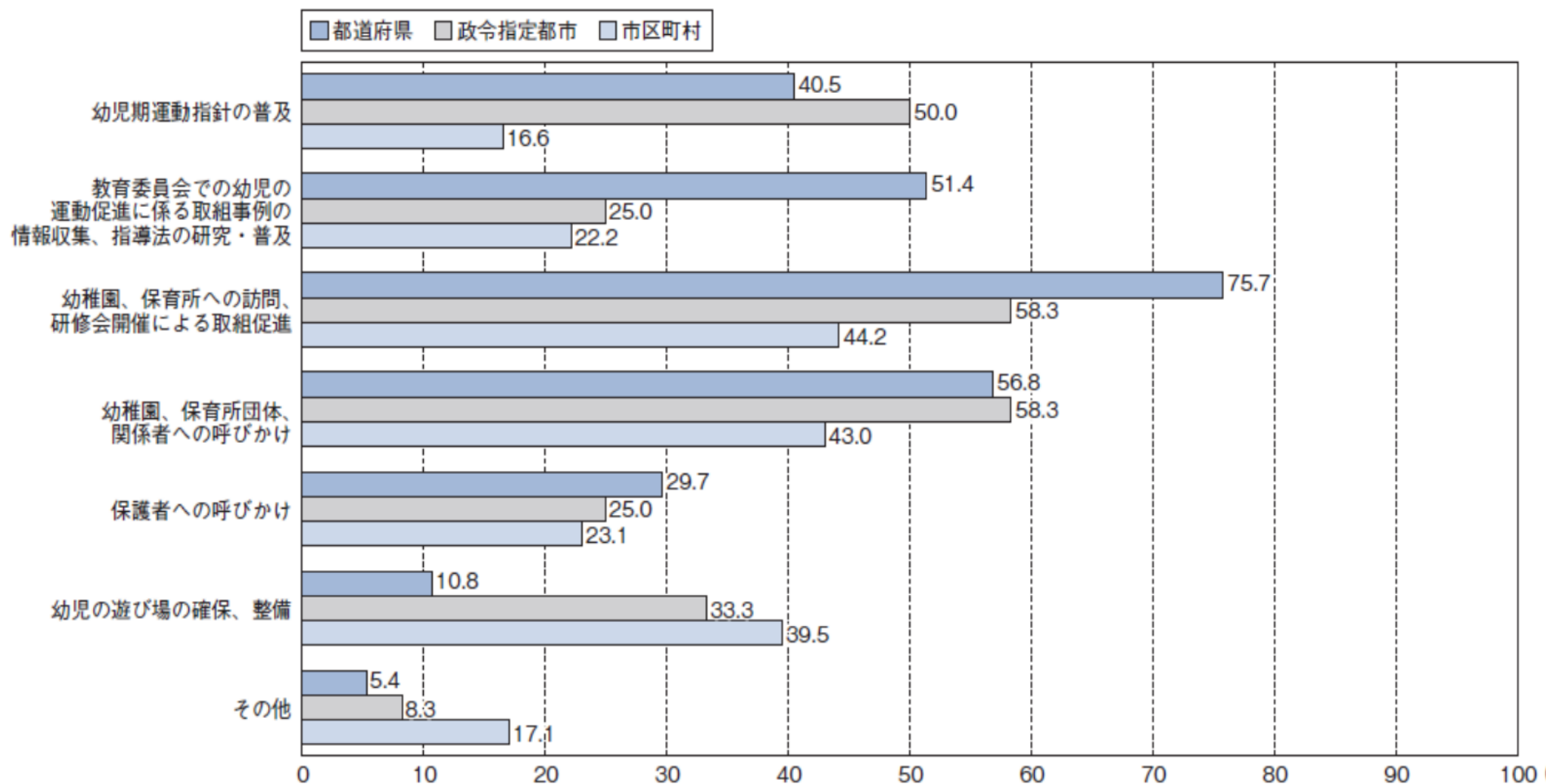


令和6年度



「幼児の運動促進のための取組を実施している」と回答した教育委員会の割合

「実施している」「実施する予定である」の回答グループから得られた取組の内容

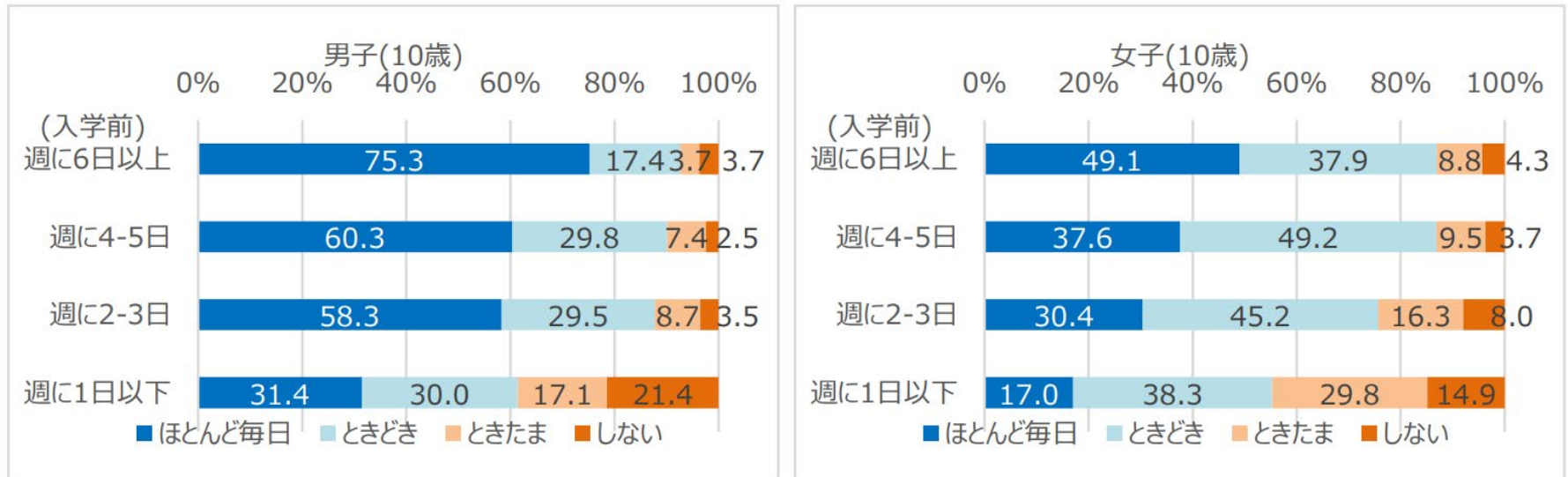


(出典) 令和6年度スポーツ庁「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」

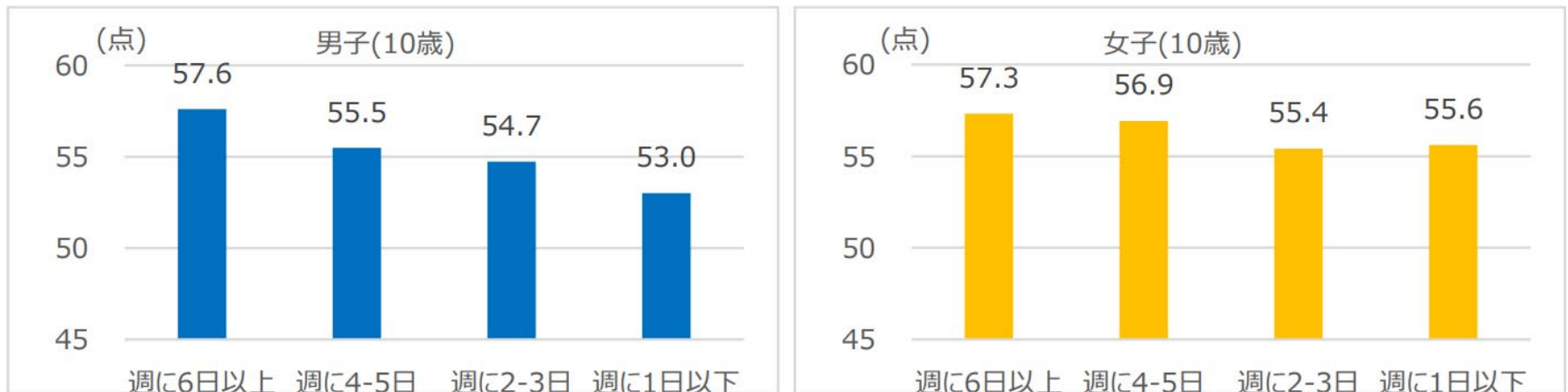
幼児期の運動遊びと運動能力等との相関

幼児期に外遊びをよくしていた小学生は、日常的に運動し、体力も高い。

入学前の外遊びの実施状況別に見た運動・スポーツ実施状況（10歳）



入学前の外遊びの実施状況別に見た新体力テスト合計点（10歳）



4 幼児期の運動の在り方

（1）運動の発達の特性と動きの獲得の考え方

幼児期は、生涯にわたって必要な多くの運動の基となる多様な動きを幅広く獲得する非常に大切な時期である。動きの獲得には、「動きの多様化」と「動きの洗練化」の二つの方向性がある。

「動きの多様化」とは、年齢とともに獲得する動きが増大することである。幼児期において獲得しておきたい基本的な動きには、立つ、座る、寝ころぶ、起きる、回る、転がる、渡る、ぶら下がるなどの「体のバランスをとる動き」、歩く、走る、はねる、跳ぶ、登る、下りる、這う、よける、すべるなどの「体を移動する動き」、持つ、運ぶ、投げる、捕る、転がす、蹴る、積む、こぐ、掘る、押す、引くなどの「用具などを操作する動き」が挙げられる。通常、これらは、体を動かす遊びや生活経験などを通して、易しい動きから難しい動きへ、一つの動きから類似した動きへと、多様な動きを獲得していくことになる。

「動きの洗練化」とは、年齢とともに基本的な動きの運動の仕方（動作様式）がうまくなっていくことである。幼児期の初期（3歳から4歳ごろ）では、動きに「力み」や「ぎこちなさ」が見られるが、適切な運動経験を積むことによって、年齢とともに無駄な動きや過剰な動きが減少して動きが滑らかになり、目的に合った合理的な動きができるようになる。

次に、目安として幼児期における一般的な運動の発達の特性と経験しておきたい遊び（動き）の例について示す。なお、幼児の発達は、必ずしも一様ではないため、一人一人の発達の実情をとらえることに留意する必要がある。（略）

（2）運動の行い方

幼児期は、生涯にわたる運動全般の基本的な動きを身に付けやすく、体を動かす遊びを通して、動きが多様に獲得されるとともに、動きを繰り返し実施することによって動きの洗練化も図られていく。また、意欲をもって積極的に周囲の環境に関わることで、心と体が相互に密接に関連し合いながら、社会性の発達や認知的な発達が促され、総合的に発達していく時期である。

そのため、幼児期における運動については、適切に構成された環境の下で、幼児が自発的に取り組む様々な遊びを中心に体を動かすことを通して、生涯にわたって心身ともに健康的に生きるための基盤を培うことが必要である。

また、遊びとしての運動は、大人が一方向的に幼児にさせるのではなく、幼児が自分たちの興味や関心に基づいて進んで行うことが大切であるため、幼児が自分たちで考え工夫し挑戦できるような指導が求められる。なお、幼児にとって体を動かすことは遊びが中心となるが、散歩や手伝いなど生活の中での様々な動きを含めてとらえておくことが大切である。

これらを総合的に踏まえると、幼稚園、保育所などに限らず、家庭や地域での活動も含めた一日の生活全体の身体活動を合わせて、幼児が様々な遊びを中心に、毎日、合計60分以上、楽しく体を動かすことが望ましい。また、その推進に当たっては、次の3点が重要である。

幼児期運動指針（抜粋）②

①多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること

幼児期は運動機能が急速に発達し、体の基本的な動きを身に付けやすい時期であることから、多様な運動刺激を与えて、体内に様々な神経回路を複雑に張り巡らせていくことが大切である。それらが発達することにより、普段の生活に必要な動きをはじめ、とっさの時に身を守る動きや将来的にスポーツに結び付く動きなど多様な動きを身に付けやすくすることができる。そのためには、幼児が自発的に様々な遊びを体験し、幅広い動きを獲得できるようにする必要がある。幼児にとっての遊びは、特定のスポーツ(運動)のみを続けるよりも、動きの多様性があり、運動を調整する能力を身に付けやすくなる。幼児期には体を動かす遊びなどを通して多様な動きを十分経験しておくことが大切である。

体を動かす遊びには、先に挙げたように多様な動きが含まれる。例えば、鬼遊びをすると、「歩く、走る、くぐる、よける」などの動きを、夢中になって遊んでいるうちに総合的に経験することになる。そのため、幼児期には様々な遊びを楽しく行うことで、結果的に多様な動きを経験し、それらを獲得することが期待される。

②楽しく体を動かす時間を確保すること

多様な動きの獲得のためには、量（時間）的な保障も大切である。一般的に幼児は、興味をもった遊びに熱中して取り組むが、他の遊びにも興味をもち、遊びを次々に変えていく場合も多い。そのため、ある程度の時間を確保すると、その中で様々な遊びを行うので、結果として多様な動きを経験し、それらを獲得することになる。

文部科学省調査では、外遊びの時間が多い幼児ほど体力が高い傾向にあるが、4割を超える幼児の外遊びをする時間が一日1時間（60分）未満であることから、多くの幼児が体を動かす実現可能な時間として「毎日、合計60分以上」を目安として示すこととした。幼児にとって、幼稚園や保育所などでの保育がない日でも体を動かすことが必要であることから、保育者だけでなく保護者も共に体を動かす時間の確保が望まれる。

なお、幼児が体を動かす時間は、環境や天候などの影響を受けることから、屋内も含め一日の生活において、体を動かす合計の時間として設定した。

③発達の特性に応じた遊びを提供すること

幼児に体を動かす遊びを提供するに当たっては、発達の特性に応じて行うことが大切である。幼児は、一般的に、その時期に発達していく身体の諸機能をいっぱいに使って動こうとする。そのため、発達の特性に応じた遊びをすることは、その機能を無理なく十分に使うことによってさらに発達が促進され、自然に動きを獲得することができ、けがの予防にもつながるものである。また、幼児の身体諸機能を十分に動かし活動意欲を満足させることは、幼児の有能感を育むことにもなり、体を使った遊びに意欲的に取り組むことにも結び付く。

したがって、幼児期の運動は、体に過剰な負担が生じることのない遊びを中心に展開される必要がある。発達の特性に応じた遊びを提供することは、自発的に体を動かして遊ぶ幼児を育成することになり、結果として無理なく基本的な動きを身に付けることになる。

これらを踏まえ、幼児の興味や関心、意欲など運動に取り組んでいく過程を大切にしながら、幼児期に早急な結果を求めるのではなく、小学校以降の運動や生涯にわたってスポーツを楽しむための基盤を育成することを目指すことが重要である。